

すべてのいのちが尊重される社会を目指し、情報発信のための媒体を発刊する。

誰もが何らかのハンディ（欠点、弱み）を抱えている。そのハンディを共有することで、障害を持つ人も、そうでない人も、ともに暮らす社会を創造していきたい。そうした願いから生まれたフリーハンディキャップ協会と雑誌『ディブソル』。弱い存在である人間が、よりよく生きるために、いま、考えなくてはならないこととは……？

自立への道を支援する雑誌『ディブソル』。

障害を持った人たち、高齢者、あるいは貧困にあえぐ人

たちは、時として「社会的弱者」と呼ばれる。では、一人ひとりを見た場合、弱いものではない人間などいるのだろうか。一人では生きられないという事実は、それだけで人間の弱さを象徴するものであり、誰もが欠点や弱点や苦手なことを抱えている。さらに老いや病や死から逃れることのできる人はいない。その意味で、すべての人間は本来、等しく弱い存在なのではないだろうか。その弱さを絆として共有し、障害を持った人や高齢者など、いわゆる社会的に弱い立場とされている人々を切り離すのではなく、地域社会の一員として認め合い、ともに暮らせる社会。それが、等しく弱いものたちで構成される社会のあるべき姿で



2009年の年末に創刊された『ディブソル』

ディブソル Deep Solution
多様性社会の再生シリーズ1

被災地の現実

東日本大震災の現実

今日もプリキカンの音がこだまします

【障害者たちの現状】
底をついた医薬品、動かなくなった人工呼吸器……避難所生活を断念せざるをえなかった障害者の現実

【被災地への支援】
常に足りない人・物・金、疲弊していく被災者、何とか支援したい、その願いを届けるために

【来たる大規模災害に備えて】
日ごろから備えておきたいものは？いかにして避難するのか？
災害弱者の目線で「防災」を考える

障害者の働く現場

今日もプリキカンの音がこだまします
(こころみ学園)

地域に根ざし、開かれたコミュニティーを目指して(清瀬わかば会)

仲間と協力し、地球環境保護に挑戦(びぐれっと)

游学社

現在制作中の障害者が働く現場の現状と東日本大震災後の障害者の現状を2大テーマに据えた『ディブソル』

はないだろうか。

そのような問題意識のもとで設立されたのが、「フリーハンディキャップ協会」である。すべての人たちが互いに連携し、補い合い、ハンディから解放され、自立し、その命を尊重される人生を送れるようにお手伝いするというのが、協会の目的である。

「発端は、家庭から出る廃食油を回収し、植物性ディーゼルエンジン用燃料にリサイクルする活動を続けている『台所油田』という組織の理事長、柴谷武男さんです。彼の仲間の一人に、軽度の知的障害の娘を持った方がいて、その娘さんができる仕事はないかと考えているときに、『BIG ISSUE』という雑誌に出会いました。あれと同じように、雑誌を自ら売ること、自立の道が開けるのではないかと、フリーハンディキャップ協会を設立し、『ディブソル』という雑誌を作ることを思い立ったのです」

そう話すのは、協会の理事を務め、『ディブソル』の編集を行う(株)游学社の遠藤真彌さん。

障害者の実状を知ってもらおう手がかりに。

こうして2009年の年末に、「ハンディがあるからつながれる！共に生きる、自由に生きるための応援マガジン！」と銘打った雑誌『ディブソル』は創刊された。フリーハンディキャップメンバーが定価400円の雑誌を1冊販売するごとに、200円を自立資金として得られる仕組みとした。「しかし、現状は厳しいという一言です。福祉関係の施設や団体、全国の図書館などが置いてくれましたが、まったく知名度のない雑誌ですから、それをいきなり『買ってください』とメンバーが持っていても簡単にはいかない。ボランティアのサポートをつけるなど、販売のためのしっかりとした組織づくりの必要性を痛感しました」と、遠藤さん。

AJOSCの助成を受けたフリーハンディキャップ協会では、創刊号に続く第2号の制作や、知名度向上や販売のためのネットワーク強化に取り組んだ。ところが制作途中

担当者より



誰もが自立し、共生できる社会に向けて助成を役立てたい。

NPO法人 台所油田
フリーハンディキャップ協会 理事
遠藤真彌さん

障害者のみならず、弱い立場にいる方々や高齢者なども巻き込んだ拠点づくりがしたいという思いで立ち上げた協会であり、雑誌です。助成金は、編集制作費や印刷費の一部として大いに役立ちました。一般の方々の認知度向上につなげていきたいと思っています。

で、東日本大震災が起きた。直後、被災地の障害者についての情報が入ってこなかったが、かなり劣悪な状況に置かれていることがわかってきた。そこで、遠藤さんたち編集スタッフは、急遽、雑誌の記事構成を見直し、障害者が働く現場の実状と、東日本大震災後の障害者の現状を2大テーマに据えた。

「やはり、大震災後の障害者の問題は避けて通れない。そのためのテーマ変更ですが、『ディブソル』の体裁や販売方法も、当初とはやや違ったものになります。雑誌というより、むしろ単行本のスタイルに近いものになり、販路もメンバーによる直販ではなく、少しでも一般の方々に障害者の置かれている現状を知ってもらいたいという願いから、書店での販売を考えています。7月には、発行できる予定です」

誰かが生きにくいと感じる社会は、本当は誰にとっても生きにくい社会のはずだ。そうした社会の現状から眼をそらしたり、あるいは無関心でいることは、不幸な社会に加担することにつながる。そのような状況を打開するためにも、フリーハンディキャップ協会や『ディブソル』の活躍に期待したい。